

獄中の作（頼 鴨厓）

雲を排し 手ずから 妖熒を掃わんと 欲し

失脚 墜ち 来る 江戸の城

井底の 痴蛙 憂慮 過ぎ

天辺の 大月 高明を 欠く

身は 鼎鑊に 臨んで 家に 信 無く

夢に 鯨鯢を 斬つて 剣に 声 有り

風雨 多年 苔石の 面

誰か 題せん 日本の 古狂生

排雲欲手掃妖熒 失脚墜來江戸城
井底癡蛙過憂慮 天邊大月缺高明
身臨鼎鑊家無信 夢斬鯨鯢劍有聲
風雨多年苔石面 誰題日本古狂生

解説 安政の大獄で処刑された作者が、京で捕えられ、江戸に幽囚され、刑場に臨む時の作。

語釈 ※排雲 雲を押し分ける。 ※妖熒 燈燭の光、世を惑わすあやしい光。

※失脚 地位を失う。 ※井底痴蛙 井の中の蛙の意で、見聞の狭い者のたとえ。

※鼎鑊 釜ゆでの刑具となった。 ※鯨鯢 げいげい。雌雄のくじら。小魚を捕えて食べるから、悪人の長にたとえる。 ※苔石 けけむした石、けけの多く付着した石。

※古狂生 鴨厓の加号。

通釈 雪をおしわけ、怪しい光をみずから一掃しようとしたが、事成らず、地位を失い、江戸の地に落ちてきた。今の為政者たちは、井戸の中の蛙に等しく、くだらぬことをしているばかりで、朝廷の威光も幕府に遮られて、暗雲に覆われた天辺の月のように、光を失っている。自分も今、極刑にあおうとしているのに、妻子との音信を断たれ、夢の中に悪人共を斬つて、一剣高く鳴るのを聞くだけである。自分はいから刑場の露と消えるが、他日、苔むせる墓石をほらい、日本有数の風狂者のいたことを知ってくれる者がいたならば、それは望外の幸せというものである。